令和８年度　学舎通信　　令和８年１１月１日発行

For your SHOTO Vol.15

松濤学舎HP

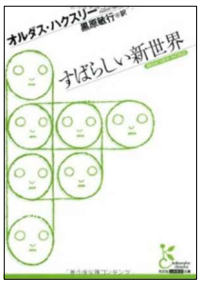
公益財団法人 佐賀育英会 松濤学舎

文責　舎監　下村昌弘

苦しみがない世界で人は人たりうるのか　ー今、私たちは何を失っているのかー

『すばらしい新世界』は、オルダス・ハクスリーが1932年に発表したディストピア小説です。ディストピアとは反理想郷・暗黒世界のこと。否定的に描かれたユートピアと言えばいいでしょうか。

機械文明の発達による繁栄を享受する人間が、自らの尊厳を見失う、その恐るべきディストピアの姿を諧謔と皮肉の文体でリアルに描いた文明論的SF小説で、ジョージ・オーウェルの『1984年』とともにアンチ・ユートピア小説の傑作と位置付けられています。



オルダス・ハクスリー『素晴らしい新世界』光文社古典新訳文庫

そこに描かれているのは、階級別の教育と、同じ規格の人間を大量に「製造」する生命操作。感情の安定をもたらすドラッグの配給。家族を解体した先にもてはやされる自由性愛などなど…。

「超管理社会」ともいえる文明世界で、人々は何一つ不満を抱かず「幸福」に暮らすことができているのです。しかしそこに、人間本来の自由や尊厳は残されているのでしょうか？

翻って現代社会を眺めてみると、ゲノム編集による優秀な胎児の「デザイン」が理論上可能となり、スマホへの快楽依存など、驚くほど『すばらしい新世界』へと近づいているような気がします。

この本は非合理さや摩擦を減らすことと引き換えに、今の私たちがいかに自由を失いかけているのか、最適化至上主義の価値観を抜け出すために何が必要なのかを考えさせてくれます。文明の進化とともに失われている何かがそこにはある。それに気づくか気づかないか…。

昨年、AI が東大理Ⅲの合格点に達したニュースが大きな話題になりました。あれから1年。AIの進化はとどまるところを知らず、ついに首席超えを達成しました。2026年度の東大入試、理科Ⅲ類の合格者最高点は 453.60 点（550 点満点）。これに対して ChatGPT は 503.59 点、Gemini は 496.54 点と、いずれも首席の点数を 50 点近く上回りました。

十数年前、情報学者の新井紀子氏が先導した東ロボくん時代、まだ AI は人間に及ばないと高をくくっていたのに。そう考えると人工知能が情緒を感じるようになる日も近いのかもしれません。

新井氏は「人工知能は人間のように情緒を感じるようになるか」の問いに「人工知能が私たちの生活に入り込む時、私たち自身から情緒を感じ取る能力が失われるからそれほど差を感じなくなるでしょう」と言っておられます。なんとも笑えない話です。

人には物語が必要だ　　ー北方謙三の体験よりー

北方謙三は唐津市生まれの小説家です。

氏が西アフリカにあるブルキナファソに入国した際、ノベリストがいる国ではないなと感じたといいます。首都でも舗装されているのはメインの道路だけであとは水たまりという感じでとても貧しい。奥地は飢餓地帯で車を停めるとわらわらと住民が食料を求めて群がってくる。こんな国にはノベリストはいない。小説よりも人々はパンを欲しがっているのだと…。


https://www2.nhk.or.jp/archives/articles/

サルトルも「飢えた子の前では文学は無力である」と言っています。

しかし、北方氏が同じ西アフリカのトーゴという国で過ごしていたある日、ホテルのコンシェルジェの女の子が年配の女性と何か話してその女性がハンカチを握りしめ空に顔を向けてぽろぽろと涙を流している。どうしたんだろうと見ているとコンシェルジェの女の子が字を読めない年配

※HP に「寮生活のひとコマ」と「舎監室の窓から」を随時更新掲載しています。（上記 QR コードからぜひ覗いてみてください。）

の女性のために物語を読んであげていたというのです。

物語には人を感動させる力がある。こんなに純粋に流してもらえるなら自分は小説家であってよいのかもしれないと初めて思ったそうです。

確かに人間は効率的で便利な生活が送れればそれで快適に生きていけます。しかし、それはただ生きているだけで“よく”生きているのではないと思うのです。“よく”生きるために必要なのは音楽とか小説とか生身の人が作り出した創造物に触れることだと思うのです。感動のない人生なんてクリープを入れないコーヒーのようなものかもしれません。たとえが古いけど。(笑)

航士さんと昌弘さん　ー新聞に掲載されましたー

園田航士さんの『神輿を担いだ日』が 10 月 9 日付の佐賀新聞に、筆者の文章が 10 月 23 日付の朝日新聞(いずれも投書欄)に掲載されました。

ラウンジに置いていましたが、皆さんに読んでほしいのでここに掲載します。(読みにくかもですが)



左から園田航士さん、吉田壮太さん

わかもの

神輿を担いだ日

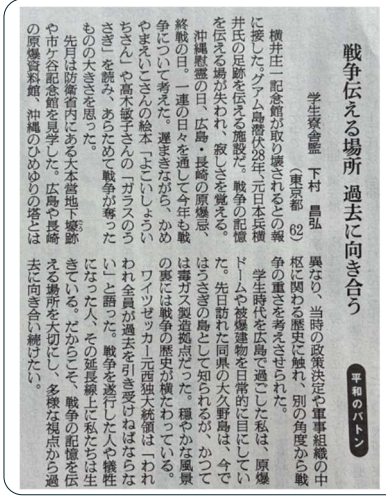
東京大3年　園田　航士

高岡八幡宮例大祭(東京都江東区)で、佐賀町の神輿は、担ぎ手を絶え間なく代えながら練り歩いた。時に首都高の下を進むなど、普段の東京では見られない異様な光景の最中におり、なにか不思議な気持ちだった。

神輿を担ぐにはリズムが大切だ。上下する神輿のリズムから外れれば、数トンの担ぎ棒が肩に打ちつけ、とても痛い思いをする。「わっしょい」という掛け声に合わせて、足や腰をうまく動かし、肩と担ぎ棒を密着させることがコツだと地元の人に教えてもらった。

喇叭が鳴ると、みんなで声を張り、大量の水を浴びながらリズムを刻む。担いでいるうちに、テクノのグループに身を委ねた時の、トランスにも似た熱狂と心地よさが満ちてきた。反復するビートに体を明け渡す点で、両者は案外遠くない。

祭りは「ハレ(非日常)」を象徴する時間と言われる。その意味を身を持って知った二日だった。次の日から始まる東京の平凡な生活に、勢いをもたらすような気がした。



戦争伝える場所　過去に向き合う

平和のバトン

学生寮舎監　下村　昌弘
(東京都　62)

横井庄一記念館が取り壊されるとの報に接した。グアム島潜伏28年、元日本兵横井氏の足跡を伝える施設だ。戦争の記憶を伝える場が失われ、寂しさを覚える。

沖縄慰霊の日、広島・長崎の原爆忌、終戦の日。一連の日々を通して今年も戦争について考えた。遅まきながら、かめやまえいこさんの絵本「ようこいしょういちさん」や高木敏子さんの「ガラスのうさぎ」を読み、あらためて戦争が奪ったものの大きさを思った。

先日は防衛省内にある大本営地下壕跡や市ケ谷記念館を見学した。広島や長崎の原爆資料館、沖縄のひめゆりの塔とは異なり、当時の政策決定や軍事組織の中枢に関わる歴史に触れ、別の角度から戦争の重さを考えさせられた。

学生時代を広島で過ごした私は、原爆ドームや被爆建物を日常的に目にしていた。先日訪れた同県の大久野島は、今ではうさぎの島として知られるが、かつては毒ガス製造拠点だった。穏やかな風景の裏には戦争の歴史が横たわっている。

ワイツゼッカー元西独大統領は「われわれ全員が過去を引き受けねばならない」と語った。戦争を遂行した人や犠牲になった人、その延長線上に私たちは生きている。だからこそ、戦争の記憶を伝える場所を大切にし、多様な視点から過去に向き合い続けたい。



グアム島潜伏28年 元日本兵・横井庄一さん

生還の記憶 伝え続けた記念館

土地売れれば取り壊しへ

令和 8 年 10 月 7 日付朝日新聞



大本営地下壕の見学会

佐賀新聞の場合、掲載されたら、後日図書券とその日の新聞が送られてきます。書き手を大切にしているなと感じます。一方、朝日の方は、投稿後、記者から電話があり、私の存在自体や書いた内容の確認がありました。もちろん事実の確認でもあり、限られた文字数に修正するためでもあります。「ファクトチェックや著作権の意識が徹底しているな」と感じたところです。

前回号で、編集と校正を経た活字媒体の信頼度を書きましたが、それを身をもって感じました。

読書週間は、毎年 10 月 27 日から 11 月 9 日まで。11 月 3 日の文化の日を真ん中にはさんだ期間です。意識高い系の松濤生としては自然と本に手が伸びてほしいものです!

月	日	曜	行事等
11	1	日	英会話教室（以降の11月の日程は調整中）
11	6	金	フットサル（テニスコート貸出）
11	8	日	防災訓練11時45分から1時間程度・秋のバーベキュー大会
11	11	水	佐賀県人事委員会11時来舎
11	12	木	★舎内講演会（藤野直明氏）20時～21時・自治会総会
11	13	金	フットサル（テニスコート貸出）
12	6	日	舎友会総会@松濤学舎
12	10	木	企業説明会（サガテレビ）・自治会総会

11/9(月)から 15(日)は火災予防週間です。防火管理規定で自分の役割を見直しておいてください。

●クイズ●

第1問　東京の 119 番通報は何秒に 1 件の割合でしょうか？

①　30 秒　②3 分　③30 分

第2問　通報のうち不要不急の内容は何割でしょうか？

①　2 割　②5 割　③8割



クイズの答えは舎監宛メールで。両問正解者のうち先着３名に松濤学舎オリジナルグッズをプレゼント！

【武蔵野の風】先週、伊豆の下田に出張した。日米和親条約の締結により下田は日本最初の開港地となった。横浜や浦賀に比べると少々ひなびた感じはするがそれでも異国情緒の一端を感じることができた。▼黒船が来航した時、日本は驚天動地の大騒ぎだったろう。異国人を見たこともない多くの庶民は恐怖におののいたのではないか。領事館として寺が使われたようだがその心境や如何に。そうした中から生まれた「唐人お吉」のような悲話もあるようだ。▼大きく話は飛ぶが竹取物語。誰もが知るかぐや姫が月に帰る伝奇物語。月からの使者は不浄な地上には降り立たず地上１Ｍを浮遊する。おびただしい光線が動けなくする。▼こうした話は人の想像力が生み出すものだ。もしかするとそういう神秘的な体験をした人が実際にいたのかもしれないと思うとおもしろいが、実際は人間の創造力の賜物だと思う。▼下田の帰路、太平洋の海原を観ながらまだ見ぬ世界を想像することの偉大さを思った。(弓口)

※HP に「寮生活のひとコマ」と「舎監室の窓から」を随時更新掲載しています。(上記 QR コードからぜひ覗いてみてください。)